



BAIEIDO-TSUSHIN

梅栄堂通信

Vol.60

'13 春号



創業三百有余年

梅栄堂

〒590-0943 堺市堺区車之町東1丁1番4号
TEL 072(229)4545(代) FAX 072(227)1672
ホームページURL <http://www.baieido.co.jp>

春の到来を告げるような、上品な香りのハーモニー

名香

九重

香づくり三百有余年
さわやかな白檀の香り 大阪堺 梅栄堂謹製

ここのえ

『ここのえ』は幽玄な水仙の香りを基調に、
東洋的な白檀のほのかな香りを織り込んだ
新しい香りのお線香です。
やさしい春の穏やかな光を感じるような、
柔らかなで、上品な調香の妙をお楽しみください。



●ここのえ 標準小売価格 1,890円 (本体価格 1,600円)



香りの情報館



銅の燻炉の下半分。
中に自由に動く火炉が見える

られてきたようだ。
**正倉院の宝物に見る
練り香の名残り**
昨年の秋、恒例の正倉院展が奈良市内の博物館であった。そこにおいて銅の燻炉一点が展示されていた。

登場をもたらしたようである。
ではこのような変化は何時に始まったのだろうか。香の事が頻繁に書き表されるようになったのは、源氏物語をはじめ、平安時代にはいつてからのこと。そんなことから、「練り香が始まったのは平安時代から」と信じ

では不便であつて、家屋内でも使えるような燻炉が開発された。火熱を使う事は避けられず、安全装置は必要なこと。また室内では焼香ではなく、放香時間の長い燻香が望まれ、香材は従来の抹香ではなく練り香の

▼ 梅の花 (練香玉を伝えるお宅の庭で)



香の散歩道

米田 該典 (大阪大学大学院医学系研究科)

「東風吹かば
においおこせよ梅の花…」

年があける頃ともなると、戸外に足を運べば寒い中にも何となく春を感じることにしばしば出会う。ここ二、三年は冬らしい冬がぶり返したのか、正月に春を感じることが少なくなつた、なんて思っている。これも齢が為せることだろうか…そればかりではないにしても、いったい春を感じるので何なんだろう。それまでの重くのしかかる冬の空に、一条の光をさすような梅の

既にも多くの人々の研究済みの資料からして、華やぐ梅の花を詠んだ歌は多いそうである。しかしそれが梅花の香りとなれば気配もないようである。でも梅の花が咲き、花数が増えると共に薫りも増え、遠くにまで梅の香りを送ってくれる。「東風吹かばにおいおこせよ梅の花…」と詠んだ気持ちも分かるほどに。紅白の梅の開花は色と香りをふんだんに我々に送り出して、春を告げてくれる。でも万葉集に香の事を詠った詩が少ないことから、古代の日本人の香りの感覚は…頓議論があるようだ。梅花が一輪でも咲いただけで、それに目を奪われ、その思いを素直に詠ったのだろう。しかし、一輪や数輪程度の開花では顔を近づけないと香りを感じる事はない。離れて眺めただけで香りを感ずるのは、いくつもの

花が咲いたときでなければできないこと。そして香りを放つ時期は、花の色よりも短いこともある。

「焼香」の香りから
「薫香」の香りへ

此の時間の差が万葉集には花の色の歌は多く、香りの歌はないことの違いとなつたのではないだろうか。でも香りが春を演出している事には誰もが気づいていた。そして、そんな自然の香りを何時でも、どこでも楽しむ事ができないか、との思いを古代の人々も抱いていたようである。その頃の香りといえば、広大な仏堂内で焚かれる大量の焼香によるものであったが、そのうち、生活の場である家屋内の客間や居間でも芳香を味わいたいのと思いが強くなり、次第に「薫香」へと、技術の開発は進んでいったようである。大きな火舎

▼ある旧家に伝わる
江戸時代中頃の練香玉



七、八世紀のこととしてもよいようである。そして、今では割れてしまっているが、割れ面を

火炉は円球形で上下分離式で、自由に回転できる。炉が四方八方どんな位置にあつても、中の火炉は水平の位置を保てるようになっていた。長年の保存のせいだけでなく、たぶん実際に使用された時の余熱のこともあつたのだろう、全体が何となく変色しているようである。正倉院には同様の作りの銀製の燻炉と、もう一点銅の燻炉もある。銀の燻炉の上蓋はいつの頃か不明となつて、江戸時代になって再製されたようであるが、下部分は当初の造りで、時期は

合わせて見ると、球形に戻せる黒く なつた小さな塊が数個残されている。形から、さらに拡大鏡で検査したことで、明らかに練り香の塊である事が判る。古来それは炭の燃えかすとしてきた。しかし、色が黒いと言う事だけで、それ以上の事ではない。勝手な推測だが、燻香の残渣なのであらうと思う。

古くから大和心には春を色と香りを感じており、心待ちする思いには違いはなかつたと思う。

Profile 米田 該典

よねだ かいすけ

Kaisuke Yoneda



所属：大阪大学大学院医学系研究科医学史料室
薬学博士 神戸市生
専攻：文化財の材質調査と保存の科学
薬用資源学 薬史学
薬学時代には正倉院薬物を調査し、博物館へ移籍後は文化財全般に枠を広げ、いつの間にか海外の文化財にまで手を広げつつある。



誰からも
愛される
和の香り



お吸い物を飲み干すときに、吸い口の柚が優しく香る…これはまさしく日本料理でしか味わえない、心憎い演出だと思いませんか。

いまでは、和の香りとして日本料理に欠かせなくなった柚子ですが、原産地は中国の長江(揚子江)の上流地域。わが国に渡来した時期は不明ですが、奈良時代か飛鳥時代であろうと考えられています。柚子は、耐寒性が強いミカン科の常緑の小高木で、枝にトゲがあるのが特徴。五月中旬には、白い五弁の花をつけます。果実は果皮がデコボコした、いわゆる「ユズ肌」で、果汁が多く爽快な酸味があり、血縁種にはスタチ、カボスなどがあります。現在では、高知、徳島等が特産地となっています。柚子は料理の香り付けのほか、柚子のボン酢や、柚子コシヨウな

どの調味料や柚子茶など広く食
品関係に使用されています。

また、最近では柚子独特の
強くてさわやかな香りを
かもしだす重要香気成分
として、「ユズノン」が話
題を呼んでいます。こ
れは黄色い柚子の皮の中
にある油胞とよばれるカプ
セルの中に含まれているとい
われています。

昔から「冬至に柚子湯に入ると一年中
風邪を引かない」という、言い伝えがあります。
柚子には血行を促進させる作用があり、湯船に
入れると精油成分が溶け出して身体を芯から温
めるため、寒さが厳しさを増す冬の季節に備え
るための、生活の知恵から生まれた習慣だった
と考えられます。冬至だけでなく、日頃から柚
子の香りに包まれながらゆったりと入浴できる
ような、ゆとりの時間を持ちたいものですね。

〈今号の表紙/ジンチョウゲ〉

●商品紹介

静かに漂う深い香り

その昔、中国・河北平原あたりに
「すべての香りが集まる国」が
あったといわれています。
いにしえ人が愛した香りを求めて
到達した香りの集大成、
それが《聚香國》です。
沈香、白檀などの高級天然香料
二十種以上を集め、秘伝の技術で
練り上げました、深遠な香りを、
ぜひご堪能ください。



●聚香國 大型バラ詰 5,250円(本体価格 5,000円)

●話題

タカラジエン又堺の旅

CS放送「いにしえ逍遙く旅
タカラジエン」の今回は、伝
統の技や文化を体験する目的
で、宝塚歌劇、宙組の蒼羽
(そらはね)りくさんが堺の街

道を体験。初めてとのことだ
したが、凛とした佇まいでピ
タリと正解、心地よい緊張の
ひとときを過ごされました。
また、産経新聞社主催の《香
道教室》で、四十名の方が香
道を体験されました。

香りの芸術品

線香は、中国で発明され、十
六世紀には堺に伝わりまし
貿易が盛んであった堺の街は
香木が入りやすく、町人文化
にもささえられ、お線香産業
が定着しました。TOYORO

BUSINESS(自然総研)

の特集「この街 この逸品」
では、《香りの芸術品》とし
ての堺の線香を取り上げ、梅栄
堂が取材を受けました。天然
香料を使い、伝統的な調合を
守りながらも、新しく世界に

も香りを届けたいと願う、中
田社長の熱いメッセージも伝
えられました。

第七十四回 東京インター
ナショナルギフトショー

東京ビッグサイトで行われた
秋のギフトショーで梅栄堂は
「伝統とModernの日本の
ブランド」フェアに出店いた
しました。初日から、たいへ
ん多くのバイヤーにお越しい
ただき、特に、今回は五カ国
語対応のお線香《イマジン》に
注目が集まりました。



▲町家風が好評だった梅栄堂のブース